

淺井了意著書考

北條 秀雄

一 淺井了意と本性寺昭儀坊了意

淺井了意の著書を解説する前に、所謂了意一人説、又は二人説に觸れる必要がある。

元祿五年刊行の『狗張子』卷頭にある林義端の序文に據ると、著者洛本性寺昭儀坊沙門了意は、元祿四年元旦かなりの高齢で歿したが、生前多くの著書を殘した事、先に瓢水子松雲處士と號して『伽婢子』を著した事等が判る。この僧了意と、寶永六年九月二十七日、壽七十を以て歿したと稱する淺井了意（名は松雲、字は子石、靜齋と號す）を對立せしめんとする了意二人説は、故朝倉無聲氏によつて代表される。だが、氏の所説が柳亭種彦と、關根只誠氏の著書を根據とし、その上に氏一流の分類説を樹てられたものである事は、既に古く水谷不倒氏を始め、今日多くの先輩によつて論じられ、その所論の矛

盾、錯雜は殆ど完全に論破し盡くされた觀がある。従つて私は、この朝倉氏の所説を再駁する事を止め、直ちに所謂了意一人説を立證しようと思ふ。勿論、朝倉氏の所謂二人説の解消は他の觀點に立つ了意二人説、乃至三人説等を解消せしむるものでないが、それらに關する問題は稿を改める事とする。即ち、私がこゝに意味する了意一人説は、本性寺昭儀坊了意と、俗人淺井了意が同一人に歸着する事を立證せんとするものである。（註一）

佛書以外の了意の著作には署名あるものが極めて少い。従つて、今日了意の作と云はれて居る多くの作品は、主として當時の書籍目錄の作者付を原據として摘出され、次第して諸種の隨筆、文學史、論文等に所載のものを數へるより仕方がない。書目は、主として書肆の都合に依つて編纂せられ、文字の誤り、重複等もあつて絶

對の信用は置けないが、兎に角、日常取扱ふ書籍を書肆自身が編纂したものである以上、その記述に甚しい誤りはあるまい。まして書目編纂當時に生存中の作家に就ての誤りは一層尠いと見ねばならぬ。

さて、書目中、一番多く彼の著が載つて居るのは、元祿五年の『廣益書籍目録』であるが、正鵠を期する爲には成る可く古いもの、即ち、了意生存中に發行された書目を参照する必要がある。今、次の六種の書目、

新板増補書籍目録

寛文十年

略稱
(寛文十年書目)

書籍目録

寛文十一年

(寛文十一年書目)

新增書籍目録

延寶三年

(延寶三年書目)

廣益書籍目録

元祿五年

(元祿五年書目)

増益書籍目録

正徳五年

(正徳五年書目)

合類書籍目録大全

享和元年

(享和元年書目)

を中心としてその作者付を拾つて見ると、了意の著書は次の如き名前であらはされて居る。

- A. 淺井松雲了意 B. 淺井松雲 C. 淺井了意 D. 松雲了意 E. 了意 F. 本性寺松雲 G. 本性寺了意 H. 本

淺井了意著書考

性寺昭儀坊了意 I. 本性寺照儀坊了意 J. 本照寺了意 K. 松雲士 L. 淺井氏。

右の内初め四つは元祿以前の書目に一番多く、『元祿書目』には單に了意とのみあるものが多い。F. G. H. は、寛文十年の書目からあるが數は極めて尠く、最後の四つに至つては各一例に過ぎない。

扱て、書目に了意とあるもの、内で、一番古いのは寛永四年の『連歌初心抄』である。次に、署名のあるものでは、寛永十四年の奥書があり、萬治三年に開板された『可笑記評判』で、瓢水子筆之と署名がある。『連歌初心抄』は、寛永八年、寛永十一年、寛永十四年、正保二年等の諸版があつてそのよく行はれた事が判る。此書、奥に「了意在判」とあるが、諸種の點より見て、初心抄の了意と、瓢水子、松雲と號した淺井了意は區別した方が妥當である。かく兩者を區別するのは、藤岡作太郎、藤井乙男、水谷不倒の諸氏を始め、諸學者の定説となつて居る様である。(註二)

問題は、『可笑記評判』以後の作品である。即ち『可笑

記評判』を書いた瓢水子を始め、瓢水子松雲處士と署名した人物、松雲と號した本性寺昭儀坊了意、及び當時の書目に前記の如き作者付をせられて居る人物が果して一人の了意であるか、それとも俗人の淺井松雲了意と僧侶の本性寺昭儀坊了意とを區別すべきであるかどうかと云ふのである。

私は一人説を次の四方面より考察したい。

(1) 書目の作者付と實際の署名

簡明を旨とする爲に、最も代表的な數部を挙げ、其署名と書目の作者付を表示しよう。

書名	署名	寛文十年目録	延寶目録	元祿目録
可笑記評判 萬治三年刊	瓢水子	意 淺井松雲了	淺井松雲	了意作
鬼利至端破 却論傳 寛文初年頃	洛下野史瓢水子	意 淺井松雲了		了意作
伽婢子 寛文六年刊	瓢水子松雲處士		淺井松雲	了意作
狗張子 元祿五年刊	洛本性寺昭儀坊沙門了意			了意作

『狗張子』の署名には、了意、松雲の印が押してあるから、本性寺昭儀坊了意が松雲と號した事は明かである。『伽婢子』亦昭儀坊了意の作なる事は、義端の序に明かな所で、『御前伽婢子』に於ける都の錦の言を借りる迄もない。従つて、釋了意と瓢水子松雲處士とは同一人物である。所で、前記の表を見ると、當時書林間、乃至世間一般に、瓢水子、又は瓢水子松雲處士が淺井松雲了意と同一人である事は疑ひもない事實だつたに相違ない。

(□) 書體

『狗張子』は義端の序に據つて、釋了意の自筆草稿を板下に用ひて居る事が判る。所で、

『江戸名所記』 寛文二年刊

『鬼利至端破却論傳』 寛文初年刊?

『勸信念佛集』 貞享五年成

『かなめいし』 寛文二年成

等の書體を『狗張子』に比する時、其間多少の精粗はあるが、大體同一人の筆に成る事は疑ひない。この事は私の獨斷でなく、『江戸名所記』の書體に於ては既に古く

藤岡作太郎氏が論定してをられる。

一寸、話が飛ぶが『江戸名所記』巻四、「禰宜町歌舞伎」の條に、

それ歌舞伎の根元は東海道名所記にしるし侍ればかかねていふも老言に似たり。

同じく巻七、「吉原」の條には、

およそ傾城傾國の根元、ならびに多少の痴者、傾城に心をまよはし、名をうしなひ、身をほろほす事、京も田舎もみなおなじきありさまでも、そのかみ東海道の道中記を編ける時に粗しるしつけ侍べりければ、今又かかねていはんは老言ならずや。

とあるから『東海道名所記』は『江戸名所記』と同一人の筆になる事が明かである。然るに、京傳の『骨董集』上編、下の巻後に、

『東海道名所記』は淺井了意が作なり。『鎌倉志』首卷、引書目六のうちに、東海道名所記、淺井松雲とあるはこれなり。

とある。『新編鎌倉志』は、延寶二年、水戸の儒者、河井

淺井了意著書考

恒久が光圀の命をうけて編纂し、貞享二年に出版した地誌であり、その首卷に百十九部の引用書目を挙げ、その作者は確實なものだけを註記してある。本書が了意の生存中に發行された事と、責任ある人の出版である事よりして、その記事は信じてよからう、してみれば、『東海道名所記』『江戸名所記』の著者が淺井松雲である事は周知の事實だつたに違ひない。

又、『鬼利至端破却論傳』の署名は洛下野史瓢水子とあるが、『寛文十年書目』には淺井松雲了意とある。『勸信念佛集』の署名は沙門了意とある。

さて、以上の諸本が書體の上から明かに同一人の筆と見られる以上、沙門了意、瓢水子、淺井松雲了意が全く同一人に歸するのも當然の理でなければならぬ。

(ハ) 内容方面

著書の内容、引用書目等から觀察しても、二人論者の云ふ如く、僧了意と俗人の淺井了意を區別する事は至難である。もつとも、假名草子そのものゝ本質として、文體に際立つた色彩がないので、その方面よりの特色、類

似、差異を明確に指摘するのはかなり困難であるが。

所で、淺井松雲、淺井了意等と淺井姓を署名に用いた作品は一つもないのであるから、書目の作者付に淺井松雲とあり、又二人論者が俗人了意の作と暗示する事をとつて、所謂僧了意の著と判明して居る作品との比較を求むるより仕方はないが、これは一々の作品を解説する場合、隨時指摘した方が便利である。唯、朝倉氏が俗人了意の著と暗示され、書目にも淺井松雲了意、又は淺井松雲等とある、『源氏雲隱抄』を見ても、多くの佛書を引用し、物語の註釋か、佛語の羅列かと思はせる書振りで、しかもその佛語の引用は出典明示、引用適切、佛者か、或は餘程佛學に素養のある人の作と思はせる。かくの如き例は、『東海道名所記』『江戸名所記』等にも見出される。殊に後者の如き、隨處に佛語を自由豊富に驅使しながら、佛語の持つ特種な意味を毫も誤つて居ない。一例として卷二、東葛西善導寺の條を引用する。

小松川善導寺は本願寺の末流を汲て、一向専念のをしへをあふぎ、雜行雜修の雲は一念發起の風にはら

ひ、自力疑心の垢は三信相應の水にあらぶ。二双四重の春の花は即得往生の床のうへに勾ひ、一十八對の秋の月は平生業成の窓のまへにほがらかなり。攝取不捨の現益をたうとみ、住不退轉の勝利にあづかる。この故に念相續の歡喜心にもよほされて、佛恩報謝の稱名をつとめ、眞實報土の悟入を待とかや。

(二) 閱歷方面

第四は、彼の閱歷方面よりの考察である。この點は別誌に紹介する事になつて居るから詳述を避けるが、唯一言すべきは『狗張子』や佛書を書いた本性寺昭儀坊了意の前半世が、かなり身分のあつた武士で、浪々の末、京都に來て僧となつた事である。この間の消息は、『堪忍記』『可笑記評判』及び二、三の佛書の自序跋に明かである。『可笑記評判』には、明に體驗と思はかれる筆致で、武士の作法、處世法を説き、浪人の不滿を述べ、その他の書の自序、跋には、浪人時代から引續く不遇、困究、不滿を漏らして居る。出家したのはかなり早く寛文初年か、それ以前と思はれるが眞宗大谷派に歸參改派し、中

絶中の寺號を復活して洛陽二條の本性寺を公許されたのは延寶三年四月以後の事で、全く彼の後半生に屬する。従つて、先に松雲處士と號し、後に釋了意と改めた事實にも何ら矛盾がない。

以上、四方面より考察せる結果、私は釋了意と俗人の淺井了意を區別せず、同一人と見る説に同意する者である。従つて、前記書目の作者付中、尠くともA. B. C. D. F. G. H. I. J. の九つは之を同一人と見る事に躊躇せぬものであるが、單に了意、松雲士、淺井氏とあるものは、一々の原本に當つて考證すべきであると思ふ。

註一、種彦の所説は彼の『好色本目錄』を、關根氏の淺井了意略傳は氏の『名人忌辰錄』を、又この二説の批判、並びに朝倉氏の所説批判に就いては、水谷不倒氏の新舊兩『列傳體小説史』『假名草子』、藤岡作太郎氏の『近代小説史』、鈴木敏也氏の『改近世日本小説史』、藤井乙男氏の『書物の趣味』第二號の論文等を参照されたい。

註二、註一に於ける水谷、藤岡、藤井諸氏の著書を参照されたい。

二 佛書解説

佛書中、了意の署名あるもの、及び了意の著と目せら

淺井了意著書考

れて居るものは『元録書目』所載の拾六部二百九卷を始めてとして、諸書に載せられて居るものを數へると全部で約三十部二百八十卷近くあるが、改題、重複が尠くないから整理すると實數はもつと尠くなる。私は今、四種に分類して解説しようと思ふ。

A、確實に了意の作と認められるもの

十二部百九十九卷

1、勸信義談鈔

三卷六冊

慶安二年十月中旬成
寶曆十一年二月上木

『享和書目』に、

勸信義談鈔

六

了意

とある。三卷であるが、各卷に本末があるから全部六冊より成る。上ノ本卷頭に次の如き序文がある。

荆山之樹也美乎哉。美矣。有玉也。噫。至寶之所存曷其如是。若夫嘉幹麗枝。秀嶺聳谿。光于此耀于彼。則非和氏者亦不得不顧焉。溫潤之氣信其不可揜也矣。由遺文而見人才亦如是乎。鈔主固一世之雄。盛德不啻赫於當時。人迄于今稱偉器。而復古救溺之跡。往往流在乎梓。其美彰彰可見。豈其可揜哉。蓋龍蟠之子。鳳翔

之子。家著戶述。恰如魚子不可數然。(下略)。

寶曆十年庚辰冬十一月

平安淳風枳巖菴遊絲山人謹題

下ノ末卷尾に了意の跋と刊記がある。

カリソメニ筆ヲソメテ心ノユクトコロラカキシル
ス。マサニコレ後生ノ嘲ヲマネカントス。シカリトイ
ヘドモマタ黙止ベキニアラズ。ネガハクハ心アラン人
コレヲヒラキテヨマントキ九牛ガ一毛ホドモソノ心
ノワロカランモナラレカシトオモフヨリ、恥ヲワスレ
テコレヲ録ス。シカシナガラ名利ノタメニアラズ。

爾時慶安二年應鐘中旬 釋了意

寶曆十一年辛巳歲二月

寺町通三條上二丁目

平安書林 芳野屋八郎兵衛梓

各冊内題の下に「釋了意著」とある。以上の序跋より見て、本書が本性寺了意の著たる事は疑ひない。内容は全く眞宗の安心鼓吹であるが、了意の他の佛書と同じく和漢の書を引用する事が甚しい。

本書は彼の佛書中、最初の著であるが、次の『善惡因果經直解』(寛文六年)迄十二年間一部の佛書もない。しかも開板は彼的全著作中最も遅れて、その死後六十年を経て居る。其上、眞宗安心の妙を突いて居る點、引用佛書等よりして慶安二年に成つたと云ふのは少々疑問の餘地が無いでもない。或はずつと後年の作ではあるまいか。だが了意の出家年代が未詳の今日に於ては疑問を抱くに止まるのみではあるが。

序文の筆者、遊絲山人に就ては識者の教示を俟ちたい

2、三部經鼓吹 七十八卷

寛文十三年九月完成
延寶二年一月上木

本書は『元祿書目』『三卷本淨土眞宗教典志』玄智等を始め諸書目に了意の作として載せられて居る。彼の著書中最も大部なもので、開板は三經各々別、寛文八年、『阿彌陀經鼓吹』十八卷が開板されてから、最後の『觀無量壽經鼓吹』三十卷が延寶二年に上梓される迄、滿六ヶ年を要して居る。『阿彌陀經鼓吹』には、大字、小字の二本があり、大字本の刊記は次の如くであるが刊記無き後摺も尠くない。

寛文戊申初春吉旦

五條橋通扇屋町丁字屋

・西村九郎右衛門開板

『寛文十年書目』に、

淨土三部經鼓吹 十八 本性寺照儀坊了意述

とあるのは、勿論『阿彌陀經鼓吹』の誤りである。次の開板は『無量壽經鼓吹』三十卷で、寛文十年である。書肆は同じく西村、「寛文庚戌初春吉旦」とある。本書も刊記無き後摺が尠くないが、一本に、

寛文庚戌端月良辰

雒陽車屋町二條下

書肆恒心堂 海老屋彌三郎綴梓

とあるものがある。大經、小經共に著者の署名あるものを見ない。

寛文十三年(延寶元年)脱稿、延寶二年開板の『觀無量壽經鼓吹』三十卷に至つて初めて了意の署名がある。同書卷末に、「三部鼓吹序引」とあつて、

……一日有客從容謂予曰三經註釋夥而有繡看辭簡

淺井了意著書考

文約體鬱不辨望洋巨窺。庶幾爲計焉。自行化他豈復不可哉。余聞客語長吁曰吾昔志于學懷於唱導而無人之解與亦不遇時輕毛瓢々徒老矣。若釣深研幽則吾豈敢乎。然以吾昔之需測子今之請耳。子姑待諸吾其有日矣。客退乃頽景之餘采撫紙上之陳義摺拾先覺之略唾分三部訓解。曰阿彌陀經曰無量壽經曰觀無量壽經本牒七十八卷已而書成焉。名曰鼓吹。……寛文癸丑季秋上澣洛下本性寺照儀坊釋了意序引。開板は同じく西村で「延寶甲寅初春吉旦」とある。一本に、

延寶甲寅初春吉旦

京師堀川通佛光寺下ル西側

河南氏四郎右衛門藏版

とあるのは求版後摺に違ひない。

3、孟蘭盆經疏新記直講 十五卷(十九卷、又十六卷)

『元祿書目』天台宗の部に、

孟蘭盆經新記直講 十九 了意

とあるもので、龍大本は同大學圖書館書目に、元祿十六

年とあるが、刊記は無い。「孟蘭盆疏新記直談序」と題する序文を卷頭に載せる。

……不顧唇吻之聒耳不惡詞誦之厭目綴新記直講欲以爲後學倡導之資助擬佛祖法界之報恩……

尙延寶第六歲次戊午四月上浣

洛之本性寺昭儀坊釋了意謹叙（了意松雲の印）

『辨疑書目錄』（寶永六年、中村富平）に、

孟蘭盆新記直談

了意作
十六冊 新記直講

とあるのを見れば、後摺に「直談」と改題した事が判る。即ち『三卷本淨土眞宗教典志』に、孟蘭盆經新記直譚、十六卷、了意作とあるのは、後摺に據つたのであらう。

4、大原談義句解 十卷

延寶六年四月成
貞享四年上木（後摺？）

『元祿書目』に、大原談義句解、十、了意とある。本書が聖覺法印の『大原談義聞書鈔』を敷衍した物である事は云ふ迄もない。貞享四年の片假名本は、外題、大原談義句解、内題、大原談義鈔句解、末卷々尾には、大原談義聞書抄句解とあつて、卷頭自序の終りに、了意は次の如く署名して居る。

延寶六年戊午四月上浣洛本性寺昭儀坊釋了意謹誌（了意松雲の印）

刊記は次の如くである。

貞享丁卯中和勝日

洛陽車屋通二條下

書肆恒心堂 海老屋彌三郎鋟板

『一卷本淨土眞宗教典志』に、

大原談義句解 十卷並鼓吹十卷 了意

とある。鼓吹とあるものを見ないので斷言は出来ぬが、異名同本か、或ひは佛光寺派立貞の作ではあるまいか。

5、聖德太子傳曆備講 三十卷 延寶六年十一月成

『元祿書目』法相宗の部に、太子傳備講、三十、了意作とあるが、『辨疑書目錄』^{古今書目の部、}上は今名、下は古名 には、

太子傳鼓吹 了意作十五冊 太子傳備考

とあるから、備講、備考、鼓吹と稱するものは皆、異名同本である。外題「聖德太子傳曆備講」とあるものは、著者の署名、刊記を載せぬが、「鼓吹」とあるものは内題「備講」とあつて、首卷に二丁の自序と、了意の署名があ

る。先づ、

操翰疏大概記抄以備他之講助即名曰『備講』

とあつて、題名の由來を示し、更に了意の自傳と見るべき語が続く。

……一日有客扣余曰……請講一篇而令知律亦不可乎。余吁爾而言吾往懷斯希矣。而無人之解焉。○○○○。今老而且倦矣。詎庸利子乎。……維時延寶六歲戊午黃鐘中浣良辰日洛本性寺照儀坊佛子釋了意謹叙（了意松雲の印）

6、往生拾因直談 十四卷 天和二年五月成

『元祿書目』淨土宗の部に、

往生十因直談 十五 了意作

とあり、『三卷本淨土眞宗教典志』にも十五冊となつて居るが、私の見た二本はいつも十四卷であつた。自序に、

往生拾因者也西方淨業之指南即證不退之津梁。……

古先鈔疏有在爲。竭其大概文釋雄約而短拙者爲不知易。余之不敏且欲勸信式爲倡導需前哲宗蹟撫摘本

淺井了意著書考

實綴而補所虧。名稱直談矣。……嘗天和二年歲次壬戌五月上浣洛本性寺昭儀坊釋了意誌（了意松雲の印）とあるに依つて内容を知る。末卷々尾に、

洛下儀章坊

松本屋

大角清兵衛

とあるが、刊行年月は無い。洛下儀章坊に至つては全く見當がつかぬ。一條を桃花、二條を銅駝と云つた坊號の内にも儀章坊はないし、了意の別號では無論あるまい。尙後考に俟つ。

7、佛說十王經直談 十三卷

天和二年七月成
天和三年四月上本

『元祿書目』天台宗の部に、

十王經直談 十五 了意

とあるが、私の見た天和三年版は十三卷本で、外題、佛說十王經直談、内題、佛說地藏菩薩發心因緣十王經註解とあつて、卷頭自序に、

……仰願匪薄識雅量之所玩賞唯欲提誘於世知之頑魯而已。……天和二年歲次壬戌夷則上幹洛之本性寺

昭儀坊釋了意謹誌（了意松雲の印）

刊記は次の如くである。

天和三癸亥曆 孟夏中旬

龜屋半左衛門

梅花書堂

錢屋儀兵衛

金屋半右衛門

8、三國法林樵談 十卷 貞享三年二月成

『元祿書目』淨土宗の部に、

法林樵談 十 了意

とあり、立智は三國法林樵談と書いて居る。未見の書であるから、開板年月、書肆に就いては何も云へない。

然るに、元祿九年開板の『勸化要文便蒙鈔』十卷なる書がある。此書は、『正徳書目』に了意の著となつて居り、舊刊『列傳體小説史』に載せられて居る。外題、^{三國}因縁勸化要文便蒙鈔、内題、勸化要文便蒙鈔とあるが、序文は明かに「法林樵談序」と題し、

……適情幽居之暇綴法林樵談五集若干卷以擬勸信倡導之資。不定篇章不絆類雋頗似隨筆。將亦孟浪。但要讀者之容易而已。庶幾采佛祖之報恩焉。……

……貞享三年丙寅仲春上浣洛之本性寺昭儀坊釋了意自序（了意松雲の印）

とあり、亦柱にも「三朝法」の三字があるから、本書が法林樵談の改題本である事が判る。『辨疑書目録』に、

法林樵談 了意作十冊 三朝事林傳

とある。この記述は反對で、恐らく『三朝事林傳』の方が改題本と思はれる。

『正徳書目』には、『法林樵談』と『便蒙鈔』を別々に並べ、共に「柏や四郎兵衛」なる出版書肆名を註記してある。即ち『便蒙鈔』刊記に、

元祿九丙午歲仲春吉日

三條通鉄屋町西へ入所

書林 山岡四郎兵衛

とある所の柏屋四郎兵衛（山岡氏）が同じ書の外題を變更出版した事が判る。

然るに本書は更に明和五年、又々改題された。即ち、『享和書目』に、

三國因縁譚 三 了意

となつて現れたものがそれである。今度の改版は極めて

念入である。先づ卷頭に、

明和戊子孟春 金龍敬雄杜夢撰・

と、例の建部綾足著『西山物語』明和五年の序文筆者と同じ

人の序文を載せ、その中に、本書は釋了意の著で、三編を出す豫定であるが、これはその第一編であると斷つて居る。奥書は、

三國因緣譚 二編 未刻

同 三編 近出

明和五戊子歲二月

六角通油小路西へ入町

小幡宗左衛門

同

平安書林

中川藤四郎

同

梶川七郎兵衛

尚、第一卷内題の下に、「釋了意述」とあり柱迄「三國

因緣譚」とあるので、如何にも了意の新刻ものの、如く思はれるが、内容は、『法林樵談』の第八、九、十卷を其儘そつくり第一、二、三卷に變更してあるのみである。板木

淺井了意著書考

も同じだが、入木は頗る上出来まで一見ただけでは判らぬ。豫告の二、三編は、書目にも見えぬから恐らく出版されなかつたらしい。

9、勸信念佛集 一卷 貞享五年七月成

『元祿書目』淨土宗の部に、

觀念佛集 一 了意

とある。貞享五年の平假名本の跋に、(内題、勸信念佛法語)

貞享五年戊辰七月上旬沙門了意書之

とある上に、本書の書體を『江戸名所記』『鬼利至端破却論傳』等に比する時、全く同一筆法であるから、了意の自筆板下を使用した事が判る、内容は他の註釋的佛書と異り、文雅麗で『方丈記』の卷頭を模した文を以て始まつて居る。假名草子と佛書の間を行く如きもので、純然たる佛書として取扱ふには惜しい。刊記は、刊行年月を缺き寺町通四條下ル二丁目、赤井長兵衛とあるのみ。

10、覺如願々鈔注解 三卷 元祿四年六月上木

上人上入願々鈔注解 三卷 元祿四年六月上木
本書は、『享和書目』に了意の著とある。外題は標題の如く、内題は「五願鈔文意」とあり、上、中、下三卷に分

れ、序文なく直ちに本論註解を試みて居る。卷尾の跋と刊記は、

短綆井ヲクミ小指海ヲハカル。ナンゾソノ深淺ヲシランヤ。蓋コノ願々鈔ハ淨土眞宗ノ樞鑰ノ凡夫出離ノ直路ナリ。文ツ、マヤカニ義ヒロシ。イマソノ理ヲヒラキテ義ヲ解セントス。ソノ明ヲ欲シテカヘリテ闇ヲマネクモノ歟。タバシコレ在家ノトモガラ大和ガナナシラン人ノタメニ安心ヲシメシテ往生ヲス、ムルガユヘナリ。詞ツタナク義イヤシ。モシ披見セン人ソノ蓮華ヲトリテ淤泥ヲシブイヤシムルコトナカレトイフナリ。

五願鈔文意終 昭儀坊 釋了意述之

元祿四_{辛未}年林鐘吉辰 開板

錦通新町西江入町

御書物所 永田 調兵衛

11、法語鼓吹 四卷 元祿六年八月上本(後刷)

『元祿書目』に、

說法々語鼓吹 四 了意

とあるもので、元祿六年の後刷は、外題、法語鼓吹、内題、存覺法語鼓吹とあり、卷四卷末に次の如くある。

洛下隱倫照儀坊釋了意(了意の印)

元祿六癸酉仲秋吉旦

書肆 宮部次右衛門

初版の刊記は未詳であるが、署名に照儀坊とあり、本性寺が抜けて居る點等より見てもかなり古く出版されたものであらう。

12、勸蓬戸筆談鈔並追加 七卷 正徳五年上木

『享和書目』に了意の著として見える。本書は、勸蓬戸

筆談鈔(上ノ本末、中ノ本末、下ノ本末、五卷、勸化_{要語}蓬戸筆談鈔追

加(本末)二卷の二部作である。上ノ本卷頭に「了意述」と

あり、下卷末丁に、

蓬戸筆談抄并追加要語卷了意學士編集之。授與親弟秘藏載尙。所謂法寶矣。懇望遺弟今令開板者也

正徳五_{乙未}天仲夏吉祥日

心齋橋筋順慶町

攝陽書林 敦賀屋九兵衛藏板

とある。追加の刊記も、攝陽書林の四字を除いては全く同一である。

跋にある遺弟はどうも判らぬが、本書が了意の遺著である事は疑ひない。尙、了意の著としては珍らしくも大阪の出版である。

B、大體了意の作と認め得るもの

四部約十九卷。

13、善惡因果經直解 六卷 寛文六年十月中旬成
寛文七年一月上木

『元祿書目』天台宗の部には、

善惡因果經直解 六 松雲(正徳書目には因果經直解)

とあるが、『寛文十年書目』には、

因果經直解 九 北野見性坊

とある。そこで、谷大、龍大本を見るに、兩書とも寛文七年開板、外題、善惡因果經直解とあるが、了意の序文署名なく、唯卷尾に、

寛文丁未初春吉旦

佛子某

五條橋通扇屋町丁字屋

西村九郎右衛門開板

とあるのみである。寛文の書目を信すれば、佛子某は北野見性坊と同一人と見ねばならぬ。然るに前記、元祿の書目には松雲とある。

更に『日本大藏經』第八冊中に所收のものは、外題、内題共に谷大、龍大本と全然一致するが、唯卷頭に「善惡因果經直解叙」と題せる漢文序を入れ、其最後に、

寛文六年丙午冬十月中泚

洛陽本性寺照儀坊釋了意叙

と、了意の署名を記して居る。その上『日本大藏經編纂會々報』第三十三號には、

本書は本會所藏の外、絶て類本を見ざる珍中の最珍書なれば特記して大方の一餐を乞ふ。

とあるから、了意の序文が入つたものもあるらしい。尤も、「日藏本」の刊記は不明であるから、果して寛文七年の出版か否かは判らぬ。

寛文書目の作者付が誤りであるとするならば全然問題は無いが、寛文書目は、作者付に了意とある『元祿書目』より古いのだからあながち、寛文書目の記載を否定

する事も出来ぬ。若し、寛文書目の記載も眞なりとすれば、了意と北野見性坊と佛子某は同一人なりと云ふ事になる。或ひは、元來北野見性坊の作であつたが、寛文七年の版本には佛子某として出版され、それが誤つて『元祿書目』に了意の作として記載された。そこで今度は、漢文序と、了意の署名を附し、了意に假託したとも考へられぬ事はない。

以上は、書目の作者付と、日藏本の署名の上より見た考へであるが、内容より見ると、序文、文體、引用書目等が頗る了意に近い。『日藏本』の原版本を見て居ないので、入木の有無、刊記も不明であり、北野見性坊に關する文献も知らぬので、一抹の疑問を残して他日の研究に俟ちたい。

14、^{三國}因縁淨土勸化往生傳 六卷 元祿二年三月上木

『元祿書目』に、

勸化三國往生傳 六 了意

とあり、玄智の『一卷本淨土眞宗教典志』にも明かに了意の著として居る。

明治末年か大正初年、京都市木屋町貝葉書院から復刻されたものは、外題『^{三國}因縁淨土勸化往生傳』とあるが、序跋、署名を缺き、拙藏のものは卷六末丁に、

元祿二禩^己三月吉旦

堀川通佛光寺上ル町

中野九右衛門

堀川通本國寺前

・小佐治半右衛門

と、刊記がある。唯、第一卷を缺くので序文、署名を知り得ないのが残念である。

内容は、諸種の往生傳を拔萃集録し、漢文のものは之を延書にする程度の、極めて特色のない文章であるからこの方面より著者を決定する事は頗る困難である。然し『元祿書目』の作者付に了意とある佛書は殆ど誤りがないし、玄智は極めて信用の出来る學者で、しかも『教典志』所載の諸本は總て原版本にあたつて居ると思はれるから、本書が了意の著である事も間違あるまい。唯、署名あるものを得る迄は、第二類に加へて置かう。

15、證事類篇

16、愚迷發心集直談、六卷

『元祿書目』に、

愚迷發心集直談 六 了意

とあるが、私の見た二本、いづれも著者の署名、刊行年月を缺き、五條佐女牛井通和泉町、松本屋 大角清兵衛刊行とあるのみである。

『一話一言』には本性寺了意と記し、『海錄』には本照寺了意と記してあるが、大田覃にしろ山崎美成にしろ署名ある版本を見たかどうか頗る疑問である。殊に美成は『延寶書目』に本照寺了意とあるのに據つたものらしい。と云ふのは、了意が本照寺と書く筈が無いからである。

唯、卷一の割註、「具ニ彌陀經鼓吹ニ云カ如シ」とか、卷三の割註、「其相ハ彌陀經鼓吹ニ云カ如シ」等と了意の『阿彌陀經鼓吹』を引用して居るのは、同じく彼の『往生拾因直談』卷三に、「具ニハ觀經鼓吹ニ云カ如シ」とある用例に一致する事、本書の序文に、當世の學者が眞名書

淺井了意著書考

を好むに反對して假名書を主張して居る點が、『可笑記評判』の卷頭で假名草子に對して述べて居る意見や、他の著書の所々に見える假名書に就いての抱負等に合致する事、(彼自身の著述の上では尠からず矛盾を犯して居るが)、『元祿書目』に了意とある佛書に殆ど誤りが無い事、さては例の引書豊富な點等より推せば、本書が了意の作と云はれるのも恐らく信ず可きであらう。

次に、『證事類篇』に就いては『愚迷發心集直談』卷一次に、

〔割註〕 俱舍婆沙等ノ說ニ由ル。具ニ予カ所撰ノ證事類篇ニ云カ如シ。

とある。然し本書は書目にも見當らず、全然未見の書であるから、何事も云ひ得ない。或ひは題名よりして、『新語園』の如きものでないかとも思ふが暫く佛書中に編入する。

C、了意の著と認め難きもの

五部三十二卷

17、釋迦一代傳記鼓吹 八卷

貞享元年二月成
元祿五年四月上木

元祿五年の版本を見ると、内題、三國釋迦一代傳記鼓吹、内題、釋迦一代傳記とあり、首卷々頭「凡例舉要」の終りには、

本性寺昭儀坊釋了意謹誌（了意松雲の印）

と署名があるから一見了意の著と思はれるが、卷八卷尾に、

天和癸亥ノ季四月八日ニ筆ヲオコシ、貞享元曆二月十五日ニ其功ヲ絶テハリヌ。偈ニ云、釋加如來眞報土

清淨莊嚴無勝是 爲度娑婆分化入 八相成道度衆生

元祿五年佛誕生日

洛陽書林 田中庄兵衛

とある部分は、本文と字體を異にし明かに入木と推定される。尙、卷頭の署名も、他と字體、墨色を異にし、了意、松雲の印も他の著書と比較すれば餘程粗雑である。私は、『享和書目』に、

釋迦一代鼓吹 十 立貞

とある、立貞の著が了意に假託せられたものであるまいかと思ふ。元來、立貞は了意と同時代、眞宗佛光寺派の

僧で、しかもその著は外題でも内容でも了意に極めて近似し、署名がないと兩人の著を混同しやすい。明治時代、活字本に復刻せられた『通安心決定鈔鼓吹』の如きは疑ひもなく立貞の作を了意に假託したものである。かゝる例を見ても、また出版書肆の田中庄兵衛は、同様な疑問の二書を了意の名に於て出版して居る極めて不信用な人物である事等よりしても、本書を了意の著と認めるには頗る疑問の餘地がある。

18、說法因緣集 十二卷 貞享三年正月上木

本書は、『佛教大辭彙』淺井了意の條に於て彼の著として取扱はれて居るが『元祿書目』を始め私の見た書目のいづれにも、書名のみで作者名は載せてない。貞享三年の版本にも、左の刊記があるのみである。

貞享三丙寅歲正月穀旦

書林 永田調兵衛

内容は『法林樵談』と同種類で、和漢の故事を盛に引用してあり、了意の佛書に近いものがあるが、單にそれのみで彼の著と斷定する譯には行かぬ。殊に、天和、

貞享、元祿頃の佛書には必ず了意の序文と署名を載せて居る事例に徴しても本書は彼の著と認め難い。

19、淨土三部經註解 六卷 正徳六年三月上木

龍谷大學圖書館書目に、

無量壽經註解鈔 六卷 了意

とある。

今、同書を檢するに、外題は無量壽經註解とあるが、内容は、無量壽經註解抄、觀無量壽經註解抄、阿彌陀經註解抄の三部作である。各卷、内題の下には「釋了意撰」なる文字があるし、觀經註解の末卷々尾には、洛陽本性寺昭儀坊釋了意誌の署名と、了意、松雲の印まであるから一見了意の著と考へられ易い。刊記は次の如くである。

正徳六龍丙申三月吉旦

京極通五條橋詰町

書林 田中庄兵衛開板

所が、この書が延寶六年刊行の『淨土三部經略解傳決』の改題本なる事は、内容の照合に依つて明かであ

浅井了意著書考

る。後者は、淨土三部經略解傳決と、淨土三部經口傳略解の二部作であるが、釋了意撰、洛陽本性寺云々の文字を始め何處にも了意の著と認定すべき辭句が無い。『小經口傳略解』の末丁に次の刊記があるのみである。

延寶六戊午年正月二十五日

野田庄右衛門板行

本書が了意の作であるならば、署名と印がある筈だし『元祿書目』にも了意作とあるべきだが、そのいづれも無い事、杜撰な内容等よりしても本書は了意の著と認め難い。

つまり、延寶六年に出版された筆者未詳の『略解傳決』を了意の歿後、釋了意撰、及び本性寺云々の辭句を入木して彼の遺著開板に擬し、正徳六年に出版したと見る可きである。かゝる所業は全く了意の盛名を裏書すると共に、書肆田中庄兵衛出版の他の二疑問書への疑ひを益々深からしむるものである。

20、勸化至要鈔 五卷 享保四年十一月上木

本書は、龍谷大學圖書館書目に了意とある片假名本で

ある。卷五卷末には次の如き署名と刊記がある。

本性寺昭儀坊釋了意謹誌

享保第四龍己亥仲冬穀旦

皇都 書林 田中庄兵衛

右によると、了意の遺著を出版したものゝ如くであるが、署名の下に了意、松雲の印がない事（了意晩年の佛書で、本性寺昭儀坊釋了意と署名した場合には必ず了意松雲の印がある）、了意の死後の出版である事、古書目に所載なき事、更に特筆すべき田中庄兵衛の出版である事等を綜合すると遽かに了意の著と斷定し得ない。否、田中庄兵衛が何人かの著を了意に假託したものと見る方が有力である。

21、通 俗安心決定鈔鼓吹 一卷

明治三十二年、活字平假名本として出版した『通安心

決定鈔鼓吹』なる書が大谷大學圖書館に在る。此書、跋に『釋了意』とある。尤もこれだけでは、無數にある釋了意の中、どの了意か判らぬが。

扨て、本書を検するに次の二句がある。

四七頁 具には予が撰擇本義にありとなり。

一五九頁 此義予論註の勸化講釋に釋せり。

所が前者は『正徳書目』に、

選擇集本義 十二 立頁

とあり、後者は『享和書目』に、

往生論註勸化講釋 二十 立頁

とあるから、此の活字本の原本が立頁の著である事は明かである。題名より考察すれば、『元祿書目』所載の作者未詳『安心決定鈔鼓吹』八卷ではあるまいか。

ともかく、この明治活字本は釋了意の著でなく、佛光寺派立頁の作で、それを釋了意なる人物に假託したとすれば、書肆の意向が本性寺了意に在つた事も推測するに難くない。

以上五部三十二卷は大體、了意の著作目録中より抹殺しても萬々誤りあるまい。

D、未見の爲、眞偽未決のもの

四部約十八卷

22、戒殺放生文平假名 四卷

本書は『元祿書目』禪宗の部に、了意の作となつて居る。未見の書であるが『元祿書目』所載の了意に關する佛書は殆ど誤りがないから、眞僞未決とは云ふものゝ、かなり信すべきである。四冊とあるから、或ひは作者未詳の假名草子『戒殺物語』二卷、『放生物語』二卷がそれではあるまいか。尤も『元祿書目』には『戒殺放生文平假名』とは別に、『放生物語』三卷とみえて居るし、『享和書目』には、『戒殺放生文平假名』を一冊としてあり、其中堂の古書發賣目錄(昭和二年)にも一冊もの『戒殺放生文假名』が見えて居るから速斷は出来ない。然し又、四卷合本で一冊に數へる事も當然あり得る事である。

京大に藏する外題『雲棲大師 戒殺物語合』
放生物語

なる假名草子は『戒殺物語』卷一、二『放生物語』卷三、四の二部合本である。二書共、同一人の手になつた事は字體、内容、序跋等よりしても、卷數の配列よりしても疑ひない。

著者が僧侶である事は、内容を檢すれば分明であるが、卷二卷尾に、寛文四甲辰孟春吉旦とあるのみで、刊

行書林、著者名を知る事が出来ない。

本書が果して了意作と云はれて居る『戒殺放生文平假名』と同一であるや否やは定め難いが、とにかくどちらも四卷である事、假名草子の方が寛文四年の出版であつて、如何にも了意がこんなものを書きさうな時代である事を參考として、他日の研究に俟ちたい。

23、恩重經和談鈔 五卷

本書は『父母恩重經』を註釋した談義物であらう。『元祿書目』や『一卷本淨土眞宗教典志』に了意の著としてある。未見ではあるが信すべきである。

24、勸化大綱抄 八卷

『正德書目』に、

勸化大綱抄 八 了意

とある。未見の書であるから斷定は出来ないが、遺著出版か或ひは何かの改題本であらうか。但し『元祿書目』と異つて了意の歿後かなり經年してから編纂された『正德書目』の記載は輕々しく信する譯には行かぬ。既に、元祿、正徳頃に了意の僞書出版が企てられて居る位だ

ら、原本を見る迄は暫く眞偽未決の部に編入しよう。

25、造像功德經直解

本書は『日本大藏經編纂會々報』第三十三號の解説中に、了意の著として舉げてある。未見の書であるが、本書が他の書目に了意作とある例を知らぬ。日藏會報の了意に關する解説は極めて杜撰であるからこの記述は頗る信じ難い。推測を逞くすれば『元祿書目』に、

一 造像功德經 堤雲

二 同科註

一 十王經 藏川

二 同科入

七 同抄 禪珍

十五 同直談 了意

とあるから、書數の少い『十王經』を見落して直ちに『造像功德經』と見くらべ、同直談とあるのを『造像功德經直解』と誤つたものではあるまいか。此考へは餘りに病的な穿鑿に過ぎるかも知れぬが、『正徳書目』『享和書目』等にも本書の書名が見當らない事より考へても以上の

推測をまんざら否定出来ぬと思ふ。

或ひは又、了意の署名ある『造像功德經直解』なる書があるとしても恐らく後年の出版で、了意に假託したものであるまいか。

以上四部は眞偽未決と決すべき書であるが、最初の二部はやゝ信すべきである。

以上で大體了意の著と云はれて居る佛書、二十五部約二百六十餘卷の考證的解説を終つた。其結果より見る時は、やはり『元祿書目』以前の書目の作者付に了意とある佛書は殆ど誤りがなく、その記載は信すべきであるが、歿後出版の佛書には、偽書、或ひは疑問の餘地尠からざるものが半ば以上を占めて居る事、新刻を装ふた改題本の尠くない事等を發見する。従つて、了意歿後の佛書、書目の記載は彼に關する限り、充分な検討が施されねばならぬ。

了意の佛書は、安心鼓吹の談義物か、聖典の通俗的な訓釋以外に出ぬ。従つて、教義の哲學的研究や、經典の科學的研究を彼の著に求める事は出来ない。彼は飽迄、

大衆を目標とする傳道者の自覺に立つて佛書を書いた。時としてその著は、餘りにも煩瑣な引用書の羅列によつて必要以上の冗漫、衒學に流れる事もあるが、それは彼の驚嘆すべき讀書記憶力と、訓詁的な時代思潮の所産であつて、唱導の立場に立つ彼の自覺には變りない。此の冗漫と衒學は、了意の全著作を貫く特長で、彼の眞骨頂は何處迄も通俗作家、文書傳道者としての立場に在る。當時の大谷派の宗學界としても、彼の性格としても、宗學者として彼に期待するのは無理でもあるし、象牙の塔に籠るのは彼の本意でもなかつた。〔昭和六、二、二五〕

〔附記〕

佛書解説、2、三部經鼓吹追加。本稿執筆後、左の刊行記ある『三部經鼓吹』を見た。

延寶五丁巳初冬

洛陽五條橋通

榊屋又兵衛板行

（昭和六、四、二）